

# 没ネタ詰め合わせセット ト（白目）

ジャック・ザ・リッパー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

注意 この作品は没ネタの詰め合わせです。

この作品は、続きが思い付かなかったり、作者的に面白くないなど言う理由で没にした作品集です。面白い作品が読みたい！と考えている読み手の皆さん、この作品はおすすめしません。面白い作品が読みたいなら、読まずに別の作品を読みにいきましょう。本当に没ネタ詰め合わせですので、続いたり続かなかったりします。ご了承ください。

# 目次

没ネタ1

にゃんこと転生者イツセー | 1

うわようし、よつよい | 5

喪つたモノ、手に入れたモノ | 16

モノクロな猫姉妹 | 27

エロとは何か？何が許されるのか？

36

一方その頃 アーシア偏 | 41

没ネタ2

型月転生者達が多すぎる！ | 47



# 没ネター

## にやんこと転生者イツセー

我輩は兵藤イツセーである。名前はもうある。

どうも、転生者の兵藤一誠です。まさか、自分が転生することになろうとは思わなかった。

転生の経緯を説明すると、俺を信号無視で突っ込んできたトラックから助けようと正義感のあるイケメンが俺を突き飛ばしたのだが、反対斜線に曲がってくるダンプカーに向かつて俺は飛んでいき、ミンチよりひでえよ状態で死んだらしい。神様から聞いたらイケメンの方は、骨折で済んだらしい。

結果的にイケメンに殺された俺は、神様に『善行も悪行も少なくて天国にも地獄にも送れない、もう一回転生してそのバランスで決める』と言われたので俺は転生した。転生特典？そんなものはない。神からは、『全く、欲深な人間どもめ。これまで数多くの転生者を見てきたが、欲するばかりの屑の集まりだな。地球の資源を食い荒らし、自分達が地球の支配者気取りだ。もう人理焼却しちやおうかな？』とか言われたので、転生特

典を人類存続にさせてもらい転生した。今の俺は、人類を救った英雄でもいい気がする。

さて、俺は今小学生なのだが、俺の腕の中には血だらけで全く元気の無い黒猫と俺に向かつて威嚇してくる白猫がいる。これはあれか？オリ主が遭遇する白音と黒歌イベントなのか？

なら、この子達を狙ってる悪魔もいるじゃないですかヤダー。戦えないこともないが、今の俺は赤龍帝だが子供で全然パワーもない。でも、普通の猫だった場合、ここに置いていくのは流石に良心が痛む。

結果、連れて帰ることにした。一応、ご近所の聖職者の紫藤さんに教えてもらった悪魔避けの結界を家に張っているの、狙われることは無いと思いたい。

俺は、連れて帰った黒猫を急いで治療してもらい、何日も何日も看病した。白猫の方は、俺が兵藤一誠だと自己紹介をするともものすごい勢いで警戒した。俺は、白猫にシロ、黒猫にクロスケと名付けた。黒猫は、治療の際雌と聞いたのだが、別にいいかと思いきロスケと呼んでいる。猫を拾ってから1ヶ月経つが、悪魔らしき人も見ないし、やっぱり普通の猫だと思った。クロスケももうすぐ傷が治るし、シロも最近は無でさせてもら

える程には仲良くなれたと思う。このまま何もなければ良いのだが。

朝起きたら、体の大事な部分が包帯で隠れている裸よりもエロい格好の今の俺より少し年上の女の子と一緒に寝ていた。

「あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！『昨日、クロスケと一緒に寝ていたと思ったら、朝起きたら痴女みたいな格好の女の子が隣で寝ていた』何を言っているか分からねえと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……頭がどうにかなりそうだった……催眠術とか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ、もつと恐ろしい片鱗を味わったぜ……。」

「ポルナレフ乙、です。」

「なっ!?!」

声が出た方を見ると、部屋の扉の前にはシロが居た。するとシロから白い煙が出る。そこには白い髪の毛の女の子が居た。白い髪の毛の女の子は、ジ○ジ○立ちをしながらハイテンションで俺に指を指し言ってきた。

「この世界にジ○ジ○はありません。なのにポルナレフのネタを使える。兵藤一誠さん、貴方は転生者ですね!」

「そういう君も、転生者なのか?」

「ええ、私、白音は転生者です！でも、お姉ちゃんは普通の人もとい妖怪ですけどね！」  
「あの、ノリノリなどころでお手数をおかけしますが、君のお姉さんをどうにかしてもらえないですか？この人少しでも寝返りしたら、大事なものが見えそうですし。」

「あ、ハイ。スンマセン。」

これが、俺達転生者の最初の出会いだった。



うわようし、よつよい

「それで、君の目的は何なんだ？」

あの後、女の子をベットに寝かせなんとか脱出した俺は、目の前で正座をする白い髪の毛の子、白音に質問した。白音は、不思議そうな顔で俺の質問に答えた。

「いえ、その台詞は私の台詞なんですけど。貴方は転生者何ですよ？ 私たちを拾ったので、このまま俺カッキーみたいなことをして落としかかるんじゃないんですか？」  
「なんでそんなことする必要があるんだ？俺は確かに主人公、兵藤一誠だけど別に原作に関わる気はないし、襲われることがなければこのまま原作には関わらないつもりなんだけど。」

俺の答えを聞いて、白音は驚きの声をあげた。

「何!? 憑依系主人公は、俺 t u e e して原作ヒロインだけじゃ飽きたらず、敵キャラとかモブもヒロインにしてハーレムを作って誰も選べないから複数の女と結婚する糞野郎ではないのか!」

「ハーレム系憑依主人公に謝れ。それに納得している人もいるから、良くも悪くもないだろ。」

俺が許せるハーレム系主人公は生徒会の○崎さんだけが、俺自身はハーレム何てする気はない。俺には、複数の異性と付き合うような甲斐性もない。

(何よりメタい話、ヒロインキャラが増えると作者が対応しきれなくなるのは目に見えている。)

「うーん、納得しました。では、私達もそろそろご家族に紹介してください。これから一緒に住みますから。」

「ん? なんて紹介する必要があるんだ? 俺は、クロスケが治ったらお前たちを野生に戻すつもりなんだけど。」

「え?」

「え?」

「……………」

この瞬間、二人の間に静寂が訪れた。

この子は何を言っているのだろうか？なんでお前を紹介しなきゃいけないんだ？俺は、猫を飼うつもり事態はなかったし、そのあとは野生に返すつもりだった。なのに、なんでこの子は家に住み着くみたいなのを言い出しているんだ？白音は俺の手を握って笑いながら言ってくる。

「……………ま、またまたあ！イツセーさんも人が悪いですねえ！そんな冗談、今時流行りませんよ！」

「いやいや、冗談じゃなくて本気なんだけど。俺は元々、治療したあとは野生に返すつもりだったんだ。お前たちを拾ったのは、良心的に可哀想だなと思って治療だけならしてやろうと思っただけだ。」

それ以上に、どう見てもお前ら厄介事しかない地雷じゃん。普通の猫なら飼ってたかもしれないけど、家族巻き込まれるのは嫌だし早く出ていってもらいたいんだけど。」

「いえいえ、大丈夫です。毎日お手伝いしますし、何より可愛い可愛い白音ちゃんをご奉仕してあげますよ。だから私の手を引き剥がそうとしないで欲しいです。」

「いやいや、確かに白音は可愛いけど、何時悪魔が襲ってくるかもしれない事を考えると、かなりハイリスクですから。あの、手を離してもらえませんか？お前なら引く手数多なんだろう？悪魔にでもなればいいじゃないか。だから手を離せよって、抱き付くな！送り出す時にはお腹一杯飯を食わせてやるから、な！」

「見捨てないでください！追手の悪魔は私が全員ぶつ飛ばしちやつたんです！チョロいアホのリアスさんの眷属になるためにここまで来たのはいいですけど、リアスさんが高校に入学するまで何処にいるか分からないんです！もう、腐って棄てられた弁当や虫を食べるような生活は嫌です！少し位ならエッチなことさせてあげますから！お願いします、私達を捨てないでください！」

俺は、白音を必死に引き剥がそうとするのだが、いかんせん悪魔に転生していない筈の年下の女の子にパワー負けしてしまっている。白音の可愛らしい顔は、最早涙や鼻水でグチャグチャだった。

少しして10時にセットしていた目覚ましが鳴り出した。この時間帯は、ご近所のイリナ君と遊ぶ約束をしているのだ。俺は、服を脱いで抱き付いていた白音から脱出し替える服をもって部屋を出る。

そして、部屋にいる白音に言った。

「何をしようが、俺はお前を住ませるつもりはないからな。クロスケが治ったらちゃんと出ていけよ。」

俺は、そのまま部屋を出ていった。

「待ちかねたぞ！我がライバル兵藤イツセー！」

「ごめんごめん。それで、今日も勇者ごっこして遊ぶのか？」

「当たり前だ！私は、エクスカリバーの使い手紫藤イリナだぞ！私が勇者をしなくて誰がする！」

「はいはい、今日も俺が悪魔役だな。早速始めようか。」

俺は、某竜のクエストの敵キャラのポーズをする。イリナ君は、木の枝を剣のように構えて向かい合う。

「よく来た勇者よ！私が魔王サターン様だ！どうだ？もし私の仲間になれば、世界の半分をお前にやろう。（棒読み）」

「うるせえ、全部寄越せ。」

「ちよっ!？」

突然イリナ君から勇者らしからぬ発言が聞こえたが、イリナ君はそのまま木の枝で俺に向かつて斬りかかってきた。俺も負けじと抵抗するが呆気なくやられた。

「ぐわああ！やゝらゝれゝたゝ！」（棒読み）」

「魔王サターン、教えてやろう。勝った奴が正義だ！負ければ悪賊軍！そして悪魔は、名前の通り悪だ！つまり、この勝負は初めから正義である私の勝利しかないのだ！ハッハッハ！」

イリナ君は、本当に自由奔放で唯我独尊な中二病だな。最早、勇者の方が悪魔みたいに思える。仕方無い、イリナ君には世の中の厳しさを教えてやらないとね。

「クツクツクツ！残念だったな勇者よ！」

「なっ!? 魔王サターン！お前は死んだんだぞ？ダメじゃないか！死んだ奴が出てきちゃあー！」

「ふん、あの程度で魔王である私が死ぬとでも？教えてやろう。ラスボスは、倒したらさらに強い第2形態や第3形態になって蘇ると言うことを！」

「ならば、何度でも倒せば良いのだ！くらえ、サターン！」

「簡単に負けるものか、イリナー！」

この日は、決着がつかないまま勇者ごっこは終わりを迎えた。

---

帰つてくると、何故か玄関で母さんが待っていた。

「ただいまー。」

「あら、イツセー！お帰りなさい。帰ってくるのを待っていたのよ！」

「ん？なんで？」

リビングに行くと、俺の目は点になった。白音が父さんの肩を揉んでいたのだ。

「お父様、肩の方はどうですか？」

「ああ、いい感じだよ！」

「白音ちゃん、次私も頼めるかしら？」

「はい、お母様！」

「……ハッ！ちよつとお前こつちにこい！」

俺は急いで白音の腕をつかんで廊下に引きずり出した。

「なんでお前がここにいるんだ！いや、猫ならまだ分かるけど！」

「イツセー君、こんな日本の諺を知っていますか？『将を射んと欲すれば先ず馬を射よ』です！外堀から埋めてあげました。」

「ふざけんな！そんな通理が通るか！」

「世の中、無理さえ通れば道理など勝手に通っていくものです。」

「イツセー、何白音ちゃんと話しているの？もしかして、お父さんと居たから妬いちやつ



たのかな？」

リビングの扉から両親がこっそり俺たちを見ていた。

「……………おい、お前は何て親に説明したんだ？」

白音は、ボソボソと俺の耳元で説明した。

「いえ、簡単な話ですよ。『息子さんとは将来を誓い合った仲で、一緒に住もうと息子さんに言われました』って伝えれば、ご両親は大喜びで私を家に住まわせると約束してくれました。」

「ふざけんな！」

「イツセー！女の子にそんな乱暴な言葉遣いしないの！」

「そっだぞイツセー！こんな可愛い女の子にプロポーズするなんてやるな！隅に置いてない奴め！」

「父さん、母さん、違うんだよ！こいつは——」

俺が説明しようとする、白音の手が俺の口を塞いだ。そして白音は、耳元で囁いて

きた。

「おっと、私の立場を悪くする発言はさせませんよ。まあ、これさえしてしまえば言い訳も意味をなくせますけどね。」

「なっ!?!んっ!」

次の瞬間、白音の手が離れたと思ったら口また塞がれ、白音の顔が目の前にあった。俺は離れようとするが、白音はガツチリとホールドして離そうとしてくれない。そしてそのまま、白音の舌が俺の口を犯していく。

1分程すると、ようやく俺と白音の唇は離れた。そして白音は親の方を向いて笑顔で呼び掛ける。

「お父様、お母様、今の私達はこんなことをする関係なんです。イツセイさんは、ツンデレなので否定するかもしれませんが、私達は愛し合っています。どうか、よろしくお願ひします。」

「あい、わかった!これからもイツセイをよろしく頼む!」

「イツセイ、ここまで進んでいたなんて。最近の若い子供は凄いな。」

その後、両親が白音と一緒にリビングに入っていった。俺は、廊下で泣いた。今ならわかる、デイ〇に無理矢理キスをされたエ〇ナの気持ちだ。今すぐ泥で口を洗いたいとすら思えてくる。その後、俺は自分の部屋に行き、下から聞こえる楽しそうな声を聞きながら部屋の隅で泣いた。

---

「ドライグ、見つけた。」

そんな部屋の隅で泣いている一誠を謎の黒い少女が空から見ていた。

## 喪ったモノ、手に入れたモノ

目が覚めると、全裸で布団に寝ていた。

可笑しい、昨日は部屋の隅で泣いていた筈なのに、俺は全裸で布団で寝ているのだ。しかも、布団の中には俺以外の暖かきがあるのだ。

「……あの、糞猫がッ！」

多分、布団の中に居る人物は白音だ。だって、床で転がっている黒歌の姿が布団から見えるのだ。俺はそのまま泣き疲れて眠ったのだろう。そして、あの白音は俺のフアー・ストキスを奪うだけでは飽きたらず、そのまま俺の処女を……野郎ぶつ殺してやる！

俺は、布団を勢い良く捲り上げようとした。そして、部屋の扉が開いて挨拶が聞こえた。

「おはようございますダーリン（笑）！朝ですよ！」

「えっ?」

「えっ?」

「……………」

部屋に入ってきたのは、布団の中に居るであろう人物だった。そして、俺は現在全裸な訳で……………。俺は急いで胸元を隠した。

「キヤア! エツチ!」

「わあああ! 隠すところそこじゃないですよ! うわあああ! 早く隠してください!」

番組内で不適切な描写がありました。

しばらくお待ちください。

現在落ち着きを取り戻し、俺は体にシーツを巻き付けていた。白音の方は顔を真っ赤にして俺の事をチラチラ見ていた。

「朝からいきなり何てモノを見せるんですか…。確かに、私は少し位ならエツチなこと

もさせてあげますとは言いましたが、いきなりそんなセクハラされるとは思いませんでしたよ……。」

「ちげえよ。朝起きたら全裸にひん剥かれていたから、お前の仕業かと思つて布団の中に居る筈のお前に文句を言つてやろうと思つただけど……。」

「何言い訳してるんですか、それでも男の子ですか！現に、私は部屋にいませんでしたし、姉は床に転がっています！なのに布団の中に誰もいる筈がないじゃないですか！」  
「えっ？じゃあ今俺の布団の中には正体不明の存在がいて、俺はそんな不審者に全裸にされて一緒に寝てたのか？何それ怖い。」

俺と白音は、布団を見る。布団は人一人分程の膨らみができていた。俺は、布団を掴んで勢い良く捲り上げた。布団の中には黒くて長い髪をした俺より少し年上に思える幼女がいた。そんな幼女を見て白音が顔を青くしていた。

「こ、こいつは！」

「知っているのか、雷電!？」

「誰がサイボーグ忍者ですか！多分ですけど、こいつはウロボロスドラゴンのオーフィスですよ！」

「えっ、ウロボロスってバイオの？」

「あつすいません。私、4から先のバイオはやったことないんで、ネタがわかりません。じゃなくて、この子は原作で世界で二番目に強いドラゴンですよ！」

「2番目って、パツとしない強さだな。来るなら世界で一番強い方が良かった。」

「えっ、なんでそんな落ち着いてるんですか？この子は原作で、テロリストの親玉やつてたりしてるのに。」

「何それ怖い。」

知らないよそんなこと。だって、俺が知ってるのはアニメの一期だけだもん。こんな幼女がテロリストの親玉とか言われても、正直信じられない。

「どうやらそこまで原作を見てないみたいですね。この子は、世界で一番強いドラゴンを倒すために仲間を集めて、テロを起こす厄介なキャラなんです。こんな幼女みたいな成でも、中身は数千、数万年生きているドラゴンですからね。合法ロリを通り越して、ババアですからヒロインとして見ない方がいいですよ。」

「酷い言われようだな。まあ、早く起きてもらって出ていってもらおう。おーい、起きてくださいー！」

俺は、幼女もとい世界で二番目に強いドラゴンの頬を叩いた。それを見ていたその状況を見ていた白音が、俺を羽交い締めにする。

「何考えてるんですか！叩いて起こすなんて！パワーインフレの激しいこの世界で、彼女が本気を出したらこの辺りは核を落とされた後みたいに焼け野原通り越して更地にされますよ！」

だが、白音の注意も虚しく世界で二番目に強いドラゴンは目を覚ました。幼女目を擦りながら回りを見て、最後に俺たちを見た。

「ドライグ、久しい。」

「俺はドライグじゃない。」

「違う、お前はドライグ。」

「ドライグは、俺の中に居るドラゴンだから俺はドライグじゃない。俺はイツセーだ。」

「イツセー？ドライグじゃない？」

「うん、俺イツセー。ドライグ違う。」



「何ですか？この、日本語覚えてたての外国人と、英語のできない日本人のコミュニケーションシヨンみたいなものは？」

「ならイツセー、我に協力してグレートレッド倒す。」

「慎んでお断りさせてもらう。」

「むう。」

俺は少女の頼みを断ると、少女が頬を膨らませた。

俺は、テロリストになりたい訳じゃない。テロリストに成るくらいなら、原作通りに人生を進める方が楽である。なので、遠回しにお断りさせてもらう。

「何で協力しない？」

「俺には力もない。ドライグも目覚めてない。だから足手まといにしかならないから諦めてくれ。」

「わかった。なら、我の力を与える。」

「えっ？うわっ！」

少女がそう言うと、少女の手から物凄くグロい蛇が出てきて俺に向かって襲い掛かっ

てきた。その蛇を見て白音が慌てる。

「一誠さん！その蛇はオーフィスの力の一部です！体内に取り込めばオーフィスの魔力を自分のモノにすることができます！」

「つまり、もしこれを受け入れたら俺は強くなるんだな！そんなのお断りだ！只でさえドラゴンを力呼び寄せるとか言われるのに、これ以上争い事の種を増やされてたまるか！」

俺は、左腕で蛇を受け止める。その瞬間、左腕から籠手が出てきた。受け止められた蛇は、籠手などお構いなしに噛みついてきた。

「ちよつと白音さん!?この蛇、活きが良いすぎませんこと!?籠手越しに噛まれる痛み有るし、籠手が掛けてるっばいんですけど！」

「ちよつとオーフィス！止めてください！一誠さんは嫌がってますから！」

「ん？お前誰？」

「えつと、私は——」

白音もまた、オーフィスと俺と同じように話そうとする。俺は必死に耐えるが、蛇は目標を何も無い右腕にして右腕に噛みついてきた。

「いつてえええ！この蛇、右腕に噛みついてきた！離せつて!?何か、どんどん右腕の中に侵入してきた!?白音！早く机にある縄跳びの紐かロープみたいな縛れる物持つてきて！倍加してもどんどん侵入される！オーフィス！早く蛇を止めてくれ！お前が勝てないのにお前の力を貰っても、勝てるわけないだろうが！」

「持つてきました！右腕を縛ります！」

格闘すること5分、右腕を縛った事で何とか体内に侵入してくる蛇の進行を止め、落ち着いた。嫌、今の俺の腕が血が止まって真っ青じゃなければ本当に落ち着けるんだが。

「オーフィス、早く蛇を取り出してくれ。今世の赤龍帝は、争い事が嫌いなんだ。無駄な力は要らないから、頼むよ。」

「わかった……………ん?……………ん?……………無理っぽい。」

「はあ?」

「蛇が取り出せなくなってる。もう、私の蛇じゃない。私の力の一部をそのまま持っていかれた。」

『嘘じゃないみたいだぞ、相棒。』

突然、左腕から声が聞こえた。あの、あなたが目覚めるのって、原作の後の方なので  
は？

「えっと、ドライグさんですか？あなたはまだ眠っているんじゃない？」

『大きな力に叩き起こされたんだ。今のお前の右腕からは、オフィスと同じ力と、俺と同じ力が感じられる。右腕を見てみる。』

「……何じゃこりゃ!？」

数秒目を離していると、右腕が人の腕じゃなくなっていた。縛った二の腕より下の腕が、左腕の籠手のように形を変えていたのだ。見た感じからは、まるで獣のような腕だった。

『もうその腕は、完全に竜化していて人の腕じゃなくなっている。だが、あのまま蛇を受

け入れていたら、肉体も竜化していたぞ。あそこで縛るという方法は懸命な判断だったな。』

「ちくしょう…… 右腕持ってかれた！」

俺は、泣いた。昨日だけで、家族とファーストキスを白音に奪われたのに、今日はいきなり右腕を世界で二番目に強いドラゴンの幼女に持っていかれた。

「ま、まあ、良かったじゃないですか！元々一誠さんはご飯を食べるときに見た感じ右利きだったし、オーフィスの力を持った右腕です！きつとすごい力が——」

『ゼロです。』

「へっ?。」

俺の右腕からオーフィスと同じ声が聞こえた。そして、その声は更に俺を地獄に追いやった。

『能力はありません、『ゼロ（無能力）』です。』

「…………… 御愁傷様です。」

白音は、俺に向かって手を合わせて頭を下げていた。まるで、仏様に挨拶をするように。俺は、もう俺の腕ではない右腕を睨み付けて泣いた。

## モノクロな猫姉妹

俺の腕を持っていかれたその後、オーフィスはまた来ると言って家から出ていった。もう二度とくんな疫病神。

竜化した腕については、念じれば元の人間の腕に戻った。だが、右腕が勝手に喋って五月蠅いのだ。それに、勝手に動いたりする。改めて、この腕が自分の腕じゃないと実感する。

『相棒。大丈夫か?』

「大丈夫じゃない、大問題だ。俺自身は戦う事なんかしたくないのに、他人に無理矢理訳のわからない物を入れてられて腕力が少し強くなっただけ、自分勝手に動いたりする右腕がある時点で地獄だよ。」

「最早、新手の○ギー状態ですからね。」

『嫌、力は無いよりはある方がいい。最終的には、白いドラゴンと決着をつけないといけないからな。』

「えっ、何それ。俺はそんな事は聞いてないぞ。」

「一誠さんは、知らないみたいなので説明しますね。古来より赤龍帝は、白龍王という相手の力を半減させるドラゴンと争っていて、その歴代神器所有者達はお互いに殺しあっているんですよ。」

「何それ、物騒。」

『そういうことだ。相棒には、来るべき戦いの時までには強くなってもらわないと困るんだ。平和に過ごしたいなら、白いドラゴンの神器所有者を殺すしかない。』

「ふざけんな。」

俺は平和な日常を望んでいるが、誰かを殺してまで欲しいとは思わない。人は、話合うことの出来る生物だ。お互いをわかり会えば、争いをする必要はないと思う。

「でも、一誠さんは高校二年に白龍王と戦うことになるので気を付けてくださいね。強くないと、家族を殺される可能性があります。あつ、殺される対象に私も入るかもしれないので、絶対に強くなってくださいね！」

「未来に夢も希望もない。」

俺は、自分に訪れる未来の出来事について考えながら、落ち込み続けるのだった。



イリナ君が引つ越した。

その話を両親にいきなり伝えられた。昨日イリナ君は、突然急ぎの予定が入り引つ越したそうだ。教会で剣がとか、子供たちが等と言いなながら急いで旅立ったらしい。せめてイリナ君とお別れを言いたかった。残念である。

そして現在、俺は少し年上の女の子に首を絞められながら押し倒されていた。相手は興奮しながら俺に質問した。

「白音を何処にやった！この屑野郎！」

「あつ、がつ……！」

女の子、黒歌は何やら勘違いしているようだ。なので説明しようと思うのだが首を絞

められてるせいで答えることができない。

「ふんっ、そうか。話す気がないのか。なら死ね！」

いえ、話す気はあります！首を絞められて声が出せないだけです！なので早く手を離し……あつ、どんどん意識が薄れていく……。

「何、私達の恩人に向かってやってんですか！このバカ姉様は！」

「みにややあ!？」

「ゲホッ、ゲホッ！」

いきなり黒歌の後頭部に日本の足が突き刺さり、黒歌はぶっ飛んでゴミ箱に頭から突っ込んだ。足の正体は、部屋に入ってきた白音のドロップキックだった。

「一誠さん！大丈夫ですか!?!首に絞められた跡がくつきりついてますけど!？」

「白音！無事だったのね！安心して、早くこいつを殺して逃げましょう！」

「姉さん、落ちて着いてください！この人は、私たちを助けてくれた人で、姉さんの傷を手

当てしてくれた恩人ですよ！襲ってきた悪魔は、もういません！」  
「そんな事、信じられるわけ——」

その瞬間、黒歌は糸の切れた人形のように倒れた。そして、俺の意識も断たれた。

「姉さん!？」

黒歌の背後には、針のような形状をした何かがあった。その何かはゆつくりと一誠の右腕に近づくと右腕に同化していった。そして、右腕が喋る。

『相手が興奮状態だったようなので沈静化させるホルモンを打ち込みました。数時間後には目覚めれると思うので、あなたが相手をしてください。視た感じ、記憶の混乱が見受けられます。』

「あつはい。つて一誠さんは大丈夫ですか!？」

『問題ありません。既に回復を行っています。この回復速度なら、首の跡も5分以内に

消えるでしょう。』

「回復って、あなたには能力が無いのでは？」

『はい、なので覚えました。宿主が擦り傷等の怪我をすることが多かったので、自然治癒能力を無理矢理活性化させているだけです。』

「…… もう、それは1つの能力なのでは？」

『いいえ、能力とは呼べません。回復力を無理矢理活性化させているだけなので、栄養のあるものを食べさせてください。お願いします。』

「わかりました。何から何まですいません。」

その後、意識の無い俺は白音に担がれて白音の部屋のベットに寝かされたらしい。白音は、姉が目覚めたので記憶の混乱をどうにかして、現状についての説明をしたそうだ。

その日の夜、俺と両親の前で黒歌が正座をして頭を下げた。

「助けていただいて、ありがとうございます。叔父様、叔母様、一誠さん。」

「別にいいのよ！白音ちゃんのお姉さんなら大歓迎よ！」

「そうだぞ！ここでは自分の家のように過ごすといい！私も娘が増えたみたいで嬉しいよー！」

両親は、黒歌がここに住むのを嬉しそうにしているが、俺はあまり嬉しくない。別に、首を絞められたことを怒っているわけではない。黒歌は、綺麗で大きくなれば絶対に美人だとわかるが、どう考えても厄介事の種にしか思えない。このまま白音を連れて、何処か遠くに行ってもらいたいと思ってしまう。もう一度言うが、別に首を絞められたことを怒っているわけではない！

「叔父様、叔母様。大事なお話があるのですが。」

俺はそんなことを考えていると、黒歌は両親に話しかける。その内容は、俺を驚かせた。

「実は、白音が一誠さんとお付き合いをしているのは、嘘なんです。」

「ええっ!?!」

「本当なの、それは。」

両親が動揺している。正直言うと、俺自身も動揺していた。もしかして、黒歌は白音と一緒にここを出ていくのか? : : : 何故だろう、寂しいより先に安堵してしまった俺は、心が歪んでいるのだろうか?

しかし、黒歌は俺に近づいて俺を抱き締めた。そして、黒歌は俺にしか聞こえない小さな声で耳元に囁いた。

「余計なことを言ったり、白音に手を出したら、殺す。」

俺を脅した黒歌は、笑顔で振り替えて両親に嘘をついた。

「この通り、お付き合いをしているのは私達なんです。白音は、私達の関係が羨ましくて嘘をついたんです。本当にすいませんでした。」

「一誠、そうだったのか?」

「そう言うことなら、ちゃんと伝えてくれれば良かったのね。」

「そうなんです、これからもよろしくお願いします御母様! 御父様!」

黒歌達は、笑顔で両親と話していた。

俺は部屋に帰って布団に入る。……  
もうやだ、癒しがほしいよお。

めっちゃ怖かった、少しチビりそうになった。

エロとは何か?何が許されるのか?

オツス!オラ、イツセー!

ネタに走るのはこのくらいにして、俺は今、とある公園で紙芝居を見ていたのだ  
が……。

「すると、川上から大きなおっぱいが流れてきたのです。」

うん、警察に連絡しよ。

全く、TPOをわきまえて欲しい。何より、おっぱいだけが流れてくるとかグロいわ。  
「ほうほう、これが噂の兵藤一誠が変態になった原因ですか。」

後ろから声があったので振り替えると、白音が水飴を舐めながら後ろに座っていた。

「それにしても、おっぱいが流れてきたとか、最早狂気すら感じますよね。」

「そうだよな。胸が好きなのは人の勝手だけど、ここまで来たら狂気だな。」

紙芝居が終わると、周りの子供たちはおっぱいコールをしながらスタンディングオ  
ベーションという奇妙な光景になった。呆れる俺に白音が質問してきた。

「一誠さんは大丈夫そうですね、やっぱり男の人は胸とか大好きなんですよね?」

「うーん、どうなんだろうな?実際に、胸が好きなのもいるけど手が好きとか言う人もい



るくらいだからな。」

「吉良さんは例外にしてもらって、一誠さんは胸についてはどう思ってます?」

「知ってると言えば、胸自体にはR18としては邪道だと言うくらいだな。らんま1/2でサンデーで初めて乳頭が確認されたらしい。女体になっっているが、男の胸だから問題ないらしい。後は、ジャンプSQのT.O.L.O.V.Eるだな。少年誌なのに乳頭の出番がなかったことの方が少ないらしい。なので、胸自体は揉もうが吸おうがセーフらしい。流石にセツ〇スはアウトだけだな。」

「結構知ってるんですね、変態さん。」

白音が何故か俺を冷たい目で見ているが、どうでもいい。それよりも、俺たちの話を聞いていた紙芝居のおじさんが俺に向かって駆け寄ってきた。

「少年、君はいい目をしている。私と一緒にすべての胸を愛するおっぱいマスターになるつもりはないか?」

「犯罪者になるつもりはない!..... ちょっと待ってろ。」

俺は公園を出て、人の多い商店街の方に駆け出した。

少しすると、一誠さんはある人物を連れて帰ってきた。それは、筋骨隆々だった。逞しい身体にフリフリのスカート、ある意味化物を越えたナニカだった。

「協力者のミルたん。紙芝居のおっさん、あんたにはやつてもらいたいことがある。」  
「によー！」

これがあの、ミルたんですか。確かに、肉体と服装のバランスがエグいですね。紙芝居のおじさんがミルたんを見て拒絶反応を示しているが、一誠さんはこんな質問をした。

「胸が大好きなんですよね?なら、このミルたんの胸を揉んでみてはどうですか?」

「ふあ!?!」

一誠さんの言葉に紙芝居のおじさんが、奇声を上げる。当たり前だ。ある意味化け物の胸を揉めとか言われれば、そんな声も出よう。

「い、嫌、遠慮しておこう。」

「おじさん言いましたよね？すべての胸を平等に愛するって。あの言葉は嘘なんですか？本当に好きなら揉んだり吸ったりできますよね？さあ！さあさあ！早くやってみてくださいよ！」

「勘弁してください！」

紙芝居のおじさんが土下座した。

紙芝居のおじさんを警察につき渡した後、俺はミルたんと握手していた。

「ありがとう、魔法少女ミルたん。君のおかげで、子供たちを悪の道に引き込む怪人変態さんを倒すことができた。」

「君も中々勇気があるによ！あんな悪い人に立ち向かうのは勇気のいることだよ！何か困ったことがあったら、また助けを呼んでもいいによ！」

俺達は、ある意味友情を越えた何かをお互いに感じていると思う。その後、ミルたんとは別れて家に帰った。今日は中々いい気分だ。最近、ろくなことが無かったからね。

「なんでですかこれ？」

白音は、何故か混乱していた。

## 一方その頃　アーシア偏

そこには、聖女と呼ばれる一人の少女がいた。

その少女は、人々の傷を直し神に愛されていると教会の人間達は彼女を聖女として祭り上げた。

そして、彼らは少女に救いを求めた。

「聖女様、どうか息子の傷をお直し下さい！」

「聖女様、妻が酷い火傷をしてしまいました。どうか救ってください。」

「聖女様、どうか我々をお救いください。」

「聖女さま、万歳！」

少女は助けを求める人達を癒し、救い続けた。それが、聖女として祭り上げられた少女の役割だからである。他人の身勝手な願いを叶え続けた少女は、自らの身を削るよう癒しの力を使い続けた。

彼女は、そんな心優しき聖女だった。

「あー、ラーメン食いてえ、カレーが食いてえ、肉が食いてえ！糞がつ！全く、金払いが良くなかったらこんな教会なんてさっさとやめてるぜ！毎日聖女様聖女様って、ブラツク企業並みにこき使いやがって！さっさと目標まで金貯めて、日本に移住したいぜ！」

ところがどっこい、現実にはそんな優しい聖女様など居なかった。彼女、アーシア・アルジエントは一人スーヴの入った皿を杯を持つようにして豪快に飲み、固いパンを蛮族のように貪っていた。

アーシア・アルジエントは、転生者という奴である。幼い頃は、親などおらず生きていくために教会のシスターとして過ごしていた。しかし、教会に入って直ぐに癒しの力が使える事が分かると、教会の人間達は彼女を聖女と勝手に決めつけ、多くの人達に金

を払わせて癒しの力を使わせた。だが、アーシアはこんな性格だ。今日まで協会側から、無理矢理聖女様を演じさせられてきたのだ。そんなアーシアのストレスは限界まで達する寸前だった。

「だ、誰か、助けてください。」

アーシアが夜の散歩に出かけると、草むらからそんな声が聞こえた。アーシアは、近づいてみると傷だらけの男が倒れているではないか。アーシアは、その男に駆け寄った。

「お願いです、助けてください。突然男達に襲われて。」

「分かりました。私は、ここのシスターです。急いで神父様に報告して、お医者様を呼ん

できますね!」

アーシアは、そう言つて教会の方に駆け出そうとすると、倒れた男がアーシアの足を掴んだ。

「行かないでくれ! さっきの男達が戻ってきたら、今度こそ僕は殺されてしまう!」

「では、私にどうしろと?」

アーシアが男に質問すると、男はニヤリと笑いこう言つた。

「君の力で僕を直して欲しい! お礼なら沢山させて貰うから!」

「……分かりました。でも、一つだけ教えてください。」

「何かな?」

次の瞬間、アーシアの足を掴んでいるニヤリと笑う男の腕は、アーシアの足に踏付けにされた。その痛みで、男は顔を歪ませる。

「……直して欲しい? お前には俺が医者にも見えてんのか?」

「君は、聖女なんだろう! 早く足を退けてくれ!」

「俺は、教会のシスターとしか自分の素性を明かしていない。なのに、何で癒しの力が使えるつて知つてんだ?」

「痛い! 足を退けてくれ! その理由は、君がアーシア・アルジエントつて知つていたんだ! 君は聖女として有名だからね。」





転生特典、  
???、  
聖女マルタの f a t e 式格闘術

「やれやれだぜ。今日はストレス解消もできたし、ぐっすり眠れそうだ。」

不良シスター、ここに爆誕！

## 没ネタ2

型月転生者達が多すぎる！

「そろそろ飯作らなきゃ。」

僕は、そんな事を言いながら布団から体を起こした。一階に降りると、誰がシャワーを浴びる音が聞こえる。きつと彼女が浴びているのだろう。もう一人の方はまだ寝ているが、もう少しすれば起きてくるだろう。

僕は、フライパンに油を引いて火をかける。フライパンが温まるまではパンをオーブントースターに入れて焼き、野菜を洗う。キャベツをパンで挟める程度に分けたら、ハムを切っていく。そろそろフライパンが温まっただろうと思ひ、卵を割って目玉焼きを作る。こしやうをかけて目玉焼きが焼き終わる頃には、オーブントースターからチンツと音が鳴った。後は、オーブントースターからトーストを取り出して、ハム、目玉焼き、キャベツを挟んで完成だ。

後は、お湯を沸かして紅茶を入れればモーニングセットの完成である。

僕が紅茶を飲む頃には、シャワーを浴び終わった彼女がタオルを巻いただけというあられもない格好で出てきた。濡れた髪が肌に張り付いて、余計に刺激的すぎる。だが、

こんな姿を何年も見ていると耐性が付いてしまった。

「全く、毎朝そんな格好で出てこないでください。」

「仕方無かるう。そなたの作る料理は、余にとつて最高の料理なのだぞ。その料理を待たずにいられる訳がなかるう？」

僕は、そこまで言われるような料理を作った覚えはないんだがなあ。すると、2階からもう一人の同居人が降りてきた。もう一人の同居人が彼女を見ると、彼女は階段を飛び降りて彼女の胸を鷲掴みにした。

「デメエ！こんな贅肉をこいつに見せつけてんじゃねえ！もぐぞコラア！」  
「痛い痛い！ヤメロオ！取れる！本当に余の胸が取れてしまう！」

そんな風にじゃれ合う二人を尻目に、僕は朝食を取る。この二人が我が家に住み着いてから数年、毎日こんな風景を目にしている。僕は朝食を食べ終わつたので、部屋で着替えて学校に行く準備をする。準備が終わつたので二人を見に行くと、まだ喧嘩をしていた。

「二人とも、そろそろ準備しないと学校に遅刻するよ。僕は、準備終わつたから先に出るよ。」

「ちよつ！待てよ！」

「まつ待つのだ！」

やっと二人は喧嘩をやめて、やっと準備を始めた。僕は、家を出て家の前を見る。家の前には石でできた壁があるのだが、壁に頭が生えていた。正確には、身長が壁の高さと同様なので、少し頭が見えてしまい出待ちしているのが丸わかりである。僕は、これを高校に入ってから毎日見ている。毎日出待ちご苦労様である。

「行つてきます！」

僕がそう言うと、壁から見える頭がピクツと反応しまるで偶然通りかかったように装いながら歩き始めた。今日もその人物に挨拶をする。

「おはよう、今日も一緒に学校に行かない？」

「……別にいいけど。」

こうやって一緒に登校するのも、自分から言えないので僕から誘わないといけない。直ぐに後ろから、朝から喧嘩をしていた二人が朝食を食べながら走ってくる。

「待てって言つてんだろ！何で先に行つちまうんだよ！」

「そうだぞ！余があそこまで頼んだのに、そなたは何故無視して行つてしまうのだ！余は悲しい！」

「君たちが朝から喧嘩してなければ一緒に出れたと思うよ。それと、食べながら歩くのは行儀悪いよ。」

僕は二人にそう言うと、二人は急いで朝食を食べる。僕と一緒に登校していた人物

が、その光景を見てイライラしたのかはや歩きになり、僕たちと距離を広げる。

僕は急いでその人物の後を追いかけた。

「待つてよ、オルタ！」

僕の追いかける彼女の姿は、f a t eのジャンヌ・ダルク「オルタ」の見た目をしている。そして、僕の後を追うように急いで朝食を詰め込むのは、f a t eのネロ・クラウディウスとモードレットの姿をしている。

彼女達がf a t eキャラの姿をしているが、別に僕はf a t eキャラの誰にも似ている訳ではない。だが、僕たちは転生者という繋がりを持っている。しかも、転生者は僕達だけじゃない。今から行く学校にも、沢山の転生者がいる。おまけに全員、型月系と来ている。

僕は、こんな濃い面子に囲まれ生活しているが、結構幸せである。